港都の黎明

ブレンワルド日記から ●1

近代化支えた商館

プロローグ

1859年7月1日、横浜は開港し、その後、日本最大の貿易港に成長した。

横浜には多くの外国商人が来日し、彼らは日本から生糸や茶などを輸出し、西洋から綿織物や毛織物などの工業製品を輸入したが、そうした商人のひとりに、1865年にシイベル・ブレンワルド商会を設立したスイス人カスパー・ブレンワルドがいた。

ブレンワルドは1838年、スイスのメンネドルフ生まれ。初めて来日した当時は日本とスイスは通商条約を結んではいなかったため、スイス政府はエーメ・アンベールを首席全権とする使節団を1863年に日本に派遣。当時24歳のブレンワルドも使節団の一員として来日した。

スイスと日本が通商条約を結んだのは、横浜到着約10カ月後の1864年2月6日である。ブレンワルドは条約締結後も一時帰国したことはあったが、そのまま横浜に滞在し、共同経営者であるヘルマン・シイベルとともに幕末・明治の横浜貿易を担い続けた。

若き日のブレンワルド（DKSHジャパン株式会社提供）

特に、生糸貿易には大きな足跡を残し、1876年の生糸輸出量では数多い外国商館の中で第3位に入っている。

このようにシイベル・ブレンワルド商会は横浜屈指の外国商館として名高かった。社屋は設立当初、山下居留地53番に置かれ、1868年に90番に移転し、90番商館と呼ばれるようになった。

また、社屋にはスイス領事館も置かれたことがあり、ブレンワルドも1866年からスイス総領事を務めている。

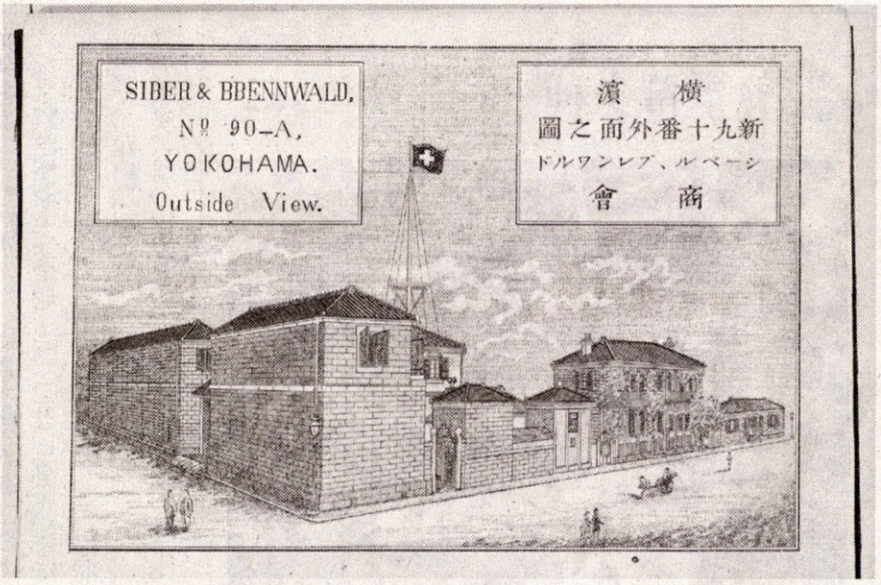
ブレンワルドは1899年、チューリヒで死去したが、同商会は社名と組織改編を繰り返しながら日本を離れることなく業務を続け、シイベル・ヘグナー商会を経て、現在も同商会の系譜を引くDKSHジャパン株式会社がスイス系商社として日本で事業を行っている。

ブレンワルドは大変筆まめな人物で、スイスを出発した時から1878年までの15年間に及ぶ日記を残している。現在、彼のドイツ語で記された日記はスイス連邦公文書館などに保管されているが、横浜開港資料館では、DKSH社の協力で日記の複製を入手し、貿易や外交に大きな役割を果たしたブレンワルドの事跡を明らかにするため、研究者とともに翻訳を進めている。

翻訳が完了し、すべてを公開するのは数年先になるが、今年4月から開港資料館閲覧室で1863年夏までの翻訳を公開する予定である。

日記は大部であり彼の活動も多岐にわたるため、すべてを紹介できるわけではない。しかし、幕末から明治初年という動乱の時代、黎明期の横浜を舞台に、外国商人と日本人がどのような交流を繰り広げたのか、幕末・明治の横浜居留地で何があったのかをブレンワルドの日記を題材に紹介していきたい。

（横浜開港資料館主任調査研究員・西川　武臣）



山下居留地90番移転後のシイベル・ブレンワルド商会の建物（「日本絵入商人録」、横浜開港資料館蔵）

港都の黎明

ブレンワルド日記から ●2

活気に満ちた上海

チューリヒから中国へ

1862年12月11日、チューリヒを発ったブレンワルドらは、マルセイユから地中海に出てカイロに渡り、紅海・アラビア海を越え、翌63年1月11日、ボンベイに到着。さらに東をめざしセイロン（現スリランカ）、ペナンを経てシンガポールに至る。

2月24日、スイス使節団一行はフランス船籍のアルフィー号で同地を発ち、北上しながらベトナム・サイゴン（現ホーチミン）を経由し、3月6日午後4時、香港に到着した。

「港はありとあらゆる国の商船でいっぱいだ」と、ブレンワルドはその活況ぶりに驚く。香港はアヘン戦争後の南京条約により、1842年に清朝からイギリスに割譲されて植民地となった。それから20年あまり。香港島の丘陵には豪華な屋敷が立ち並び、香港～広州～マカオの間には定期航路がしかれ、アメリカやイギリスの川蒸気船が走っていた。

翌7日、ブレンワルドはアンベールらとともに、川蒸気船で珠江をさかのぼり、広州に向かう。中国第3の都市である。ここでアロー号戦争の傷跡を目の当たりにする。両岸には破壊された砲台が点在し、市内の散策では、池や劇場などを備えた美しい庭園に入るが、「残念ながら1858年にフランス人がひどく破壊したので、まだ修復中であった」と記す。

アロー号戦争は、清朝の役人がアロー号に臨検しイギリス国旗を引き降ろしたことに端を発する。1857年12月、英仏軍が攻め入って広州を占領した。ブレンワルドが訪れたのは、それからわずか5年後のことだ。

沙面という場所が清朝政府から割譲されたと記しているが、これは戦争当時、反英機運の高まりで焼き払われた外国人居留地の代替地として、沙面租界が設定されたことを指している。英仏軍は、1859年に部隊を北京に進め、悪名高き円明園の略奪・焼き討ちを行った。横浜が開港する前後のことである。

ブレンワルドは広州市街でお寺や塔などを見てまわる。「どれも結局は同じように見える」という感想を抱くが、金箔の五百羅漢の像には興味を示す。大小のジャンクや水上生活者の舟でひしめく珠江の賑わいには圧倒されたようだ。

マカオにも足を伸ばした。「この町はとても景観がよく、沿岸付近はまったくヨーロッパ風で、昔日のポルトガルの隆盛を思わせる」としたためる。3月12日にマカオを発って北上し、18日に揚子江の河口で錨を下ろす。翌朝6時半に錨を揚げて河を遡り、上海港に入る。「港は常に200隻から300隻の船でいっぱいで、これまで通ってきた港の中で一番活気がある」と感嘆する。

上海では日本入国に向けての準備や当地の滞在者からの招待に忙しく、あまり街の様子を記していない。そうした中でもブレンワルドが心に留めたのは、通りのあちこちに転がる行き倒れの亡骸と、豪華な絹の衣装を着て舞う中国劇の女優という二つの対照的な姿だった。

4月6日午後2時、早春の嵐が吹き荒れる中、一行は1カ月におよんだ中国滞在を終え、スワトウ号で上海を後にする。目指すは長崎、日本である。

（横浜開港資料館主任調査研究員・伊藤 泉美）

ジャンクが行き交う珠江。20世紀初頭（横浜開港資料館所蔵、「ブルースター氏スクラップブックより）

港都の黎明

ブレンワルド日記から ●3

幕府が態度を一変

通商条約締結

スイス使節団は1863年4月に来日した後、約10カ月後の翌年2月6日、ようやく修好通商条約の調印に至った。

使節団はまず長崎に到着し、オランダ総領事デ・ウィットに迎えられた。その後、ブレンワルドは条約の予備交渉のため、使節団長アンベールらより先に横浜・江戸へ向かうこととなった。日記からは、以後の日本滞在中、一行が長崎～横浜～江戸間の移動や条約交渉において、駐日オランダ当局から全面的なサポートを受けていた様子がうかがえる。

江戸に到着したブレンワルドは、オランダ公使館が置かれた長応寺（現在、東京都港区高輪）で外国奉行と対談し、条約交渉の全権委員の任命を催促した。しかし、日本側の答えは、「大君は今、都（京都）にいて不在なので、任命は大君の帰府後になる」というものであった。

折しもこの頃、将軍家茂は京都に滞在していた。その後、アンベールらも江戸へ到着したが、幕府は、将軍の帰府までは条約を締結することはできないので、横浜で待ってほしいと要請した。

「徘徊する浪人が公使館を襲う恐れがある」「江戸は道も入り組み、逃げ込む場所もたくさんあるので、横浜の方がずっとよく防御できる」「日本の軍艦がスイス使節団全員を横浜に連れて行く用意をしている。数日のうちに危険が去り、江戸の町に浪人がいなくなれば、スイス公使と幕府の間に、この上なく誠実な友情が結べるものと思う」

日本側はこのように主張し、使節団の横浜への退去を重ねて要請した。一行はこれに抵抗したが、6月8日、ついにこれに応じ、以降、条約調印に至るまでの交渉は、横浜で行われることとなった。

ブレンワルドらが来日した1863年は、尊王攘夷運動が頂点に達していた時期であった。上洛した将軍家茂は6月6日、朝廷に対し攘夷実行期日を約束した。これを受け、長州藩は約束期日の25日に関門海峡通行の外国船の砲撃を開始、また8月には薩英戦争が勃発した。

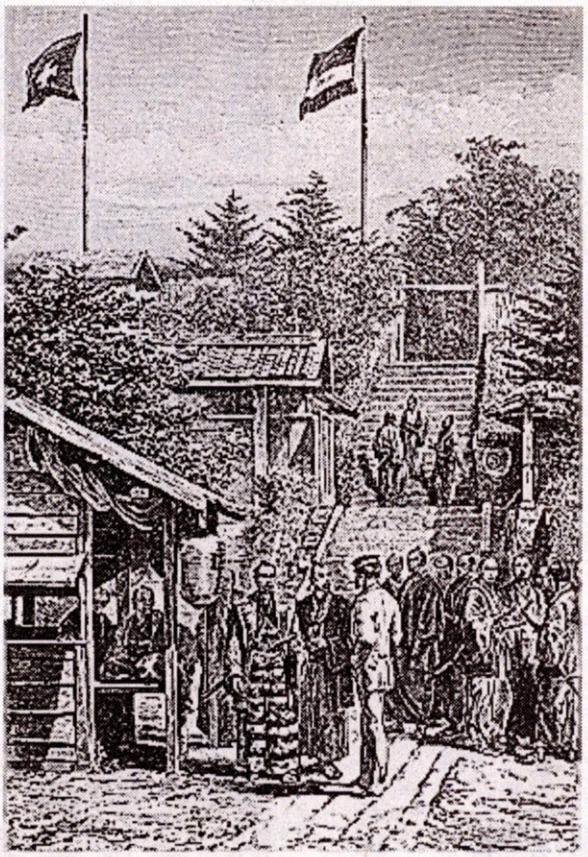
幕府は、新たな条約を締結するどころか、これまでに結んだ条約を破棄し、日本から外国人を排斥するかどうかの瀬戸際に立たされていたのである。こうして9月以降になると、幕府は横浜港を閉じること（横浜鎖港）を模索するようになり、その間、条約交渉は全く進まなかった。

しかし、12月後半に入り、日記には「今日の午前中、外国支配向の役人が三人、我々の条約について議論するため、（オランダ領事）ポルスブルックのところに来た。幕府は条約を結ぶ気持ちになっているらしい」との記述が見えるようになる。その後、交渉は急速に進み、2月、横浜港を閉じた際にはスイスも幕府の決定に従うとの条件の下に、通商条約が結ばれた。

幕府が態度を変化させた理由を日記から知ることはできないが、駐日オランダ当局が、スイスと条約を結ばない限り、欧州へ出立予定の横浜鎖港を求める幕府の使節団を、オランダ政府が受け入れないとの通告を行ったことが、関係していたともいわれている。

（ブレンワルド研究会会員・福岡 万里子）

〈次は8日に掲載予定〉



長応寺。オランダ国旗とスイス国旗が掲揚されている（「ル・ジャポン・イリュストレ」1870年より、横浜開港資料館所蔵）

■神奈川新聞社提供

港都の黎明

ブレンワルド日記から ●4

消防ポンプを献上

贈り物

スイス使節団がオランダ軍艦メドゥーサ号に乗って横浜に到着したのは1863年4月19日であったが、この時、彼らは幕府への贈り物を別便で日本に送っていた。贈り物の総数は200点以上に達し、スイスの工業製品や工芸品、書籍や絵画などが将軍や大奥、老中や若年寄に贈呈された。

そうした贈り物の中に幕府に贈られた1台のスイス製の消防ポンプが含まれていた。当時の日本では木造家屋が多かったため大火災が頻繁に発生したが、消火活動は建物を壊して延焼を防ぐ破壊消防が一般的で、「竜吐水」と呼ばれる手押しのポンプがあったものの、ほとんど役に立たなかった。

これに対し、スイス使節団が持ってきたポンプは実用的なもので、西洋の工業力を日本人に示すものであった。使節団が持ってきたポンプの具体的な能力については分からないが、1860年代半ば以降に日本に輸入されたアメリカ製やイギリス製のポンプの場合、手動のものでも1分間に約950リットルの水を放水することができ、蒸気ポンプの場合は、それ以上の能力を持っていた。

ブレンワルドの日記に初めて贈り物についての記述が見られるのは1863年4月9日で、この日、長崎に到着したブレンワルドは、既に別便で到着していた贈り物を開封した。贈り物を入れた箱は28箱に達し、この中に消防ポンプも含まれていたと思われる。

ポンプが横浜に到着したのは8月13日で、ブレンワルドは直ちに神奈川奉行にポンプの到着を伝え、ポンプを横浜から江戸に運び、江戸城でポンプの放水実験を行いたいと願い出た。日記には、神奈川奉行がポンプの献上を大変喜び、江戸城での放水実験の実施について、幕府の許可を求めたいと述べたとある。また、8月25日には、横浜のアメリカ領事館付近（現中区日本大通の横浜弁護士会館付近）でも放水実験が行われ、日記には放水を見物した日本人がずぶ濡れになったと記されている。

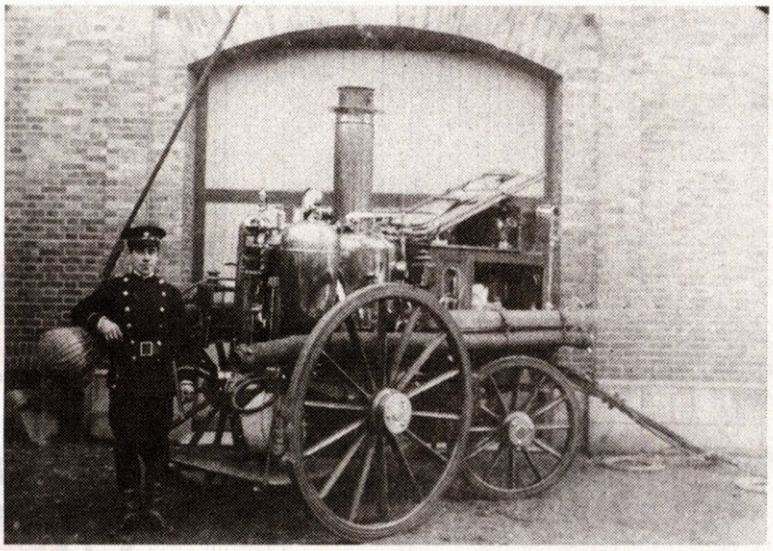
スイス使節首席全権のアンベールが外国奉行に対して、正式にポンプの贈呈を申し出たのは8月26日で、9月10日にはポンプが和船で江戸に送られた。アンベールの手紙にはポンプを江戸城で使ってもらいたいと記されているから、ポンプは船着場から江戸城に送られたと思われる。

また、幕府はポンプの返礼として使節団にブロンズの獅子の像や縮緬などを送ったことが9月30日の日記に記されている。

横浜の日本人居住区で、消防ポンプが日常的に使用されるようになったのは明治維新後の1871年のことで、この時、神奈川県は元町・野毛町・戸部町など現在の横浜市中区や西区内の町々に九つの消防隊を設置、各消防隊に西洋から輸入したポンプを配備した。

これは全国的に見ても極めて早いポンプの導入であるが、もしかすると横浜でブレンワルドが行った放水実験によって、多くの日本人がポンプの威力を知ったことがなんらかの影響を与えたのかもしれない。

（横浜開港資料館主任調査研究員・西川 武臣）



西洋式の消防ポンプ。1871年に日本に輸入されたもの。スイスの使節団が幕府に贈ったポンプも似たようなものと思われる（石橋サク子氏蔵）

■神奈川新聞社提供

港都の黎明

ブレンワルド日記から

●5

各国巻き込み争議

領事館用地

プロシア人ルドルフ・リンダウは、1859年にスイス時計組合から通商調査派遣隊の隊長として日本へ派遣され、後に「日本周遊記」を著した人物である。

そうした履歴を持つリンダウは、プロシア人でありながら、1864年6月に在日スイス総領事に抜擢され、ブレンワルドが住む横浜のスイス代表部（居留地53番）に入ることになった。この時、リンダウ35歳、ブレンワルド26歳であった。

しかし、2人は最初からそりが合わなかったようで、6月6日のブレンワルドの日記には、「リンダウが大勢の使用人と一緒に引っ越してきたので、静かな生活に慣れている僕の使用人との間で大騒ぎが起こった。

僕は終日リンダウに付き添って、外国公使や領事、いくつかの商社を訪問し、午後はリンダウたちが家中を掃除し、僕は仕事を邪魔された」とある。

さて、スイス総領事リンダウは、幕府から現在の日本大通り付近にスイス領事館用の土地を譲り受け、スイス政府に報告したが、その際、スイス政府から「領事館を建設するまで、プロシア人であるリンダウが自由に使ってよい」との返事が来た。これが事件の発端である。

その後、1866年に、スイス政府は一旦スイスに帰国していたブレンワルドを総領事に任命し、リンダウは領事に格下げとなった。また、その際、領事館用地も当分は従来通りとするとの指示がスイス政府から出された。

しかし、ブレンワルドが翌年4月に横浜に着任してみると、領事館用地はすでにリンダウがプロシア領事館用地として登記済みで、当のリンダウは辞職していた。その結果、プロシア人リンダウが勝手にスイスの土地を処分したことになってしまった。ここにおいてブレンワルドはリンダウ批判を始めることになった。

まず、諸外国の公使にリンダウの罪状を訴え、支援を願った。また「ジャパン・ヘラルド」で領事館用地に対するスイスの権利を主張した。さらに、神奈川奉行や外国奉行にも陳情した。一方、リンダウは、土地はスイス政府から譲渡されたものと反論し、争議は平行線をたどった。

当時、プロシア公使フォン・ブラントは不在であったが、名誉領事ギルデマイスターは「プロシア臣民の土地は渡せぬ」と宣言し、プロシア公使代理のオランダ公使もプロシアの利益を譲らぬと主張し、事態はスイス政府とプロシア政府との間で大問題にエスカレートした。

結局、この争議は1年余りももめた後、フランス公使が土地の交換を提案し、問題になった土地は日本に一旦返還し、帰任したフォン・ブラントが日本側と話し合うという形で解決した。駒形町の問題は、リンダウとブレンワルドの個人的軋轢から各国公使まで巻き込んでエスカレートした特殊な事件であった。

（ブレンワルド研究会会員・生熊 文）

リンダウ（1910年発行のドイツ紙より、〝Illustrierte Zeitung Leipzig〟1910年10月16日）

明治初年の日本大通り付近、領事館用地はこの近くにあった（横浜開港資料館蔵）

■神奈川新聞社提供

港都の黎明

ブレンワルド日記から ●6

〝就活〟で人脈拡大

商会設立

ブレンワルドとシイベルが横浜でシイベル・ブレンワルド商会を設立したのは1865年のことであったが、社名を「シイベル・ブレンワルド商会」と命名したのも、設立を通知する会社案内を発行したのも、その場所はロンドンだった。

そして、それは日本からスイスに戻ったブレンワルドが、シイベルに「日本で何か一緒にやらないか？」と持ちかけた時からわずか4カ月後、1865年11月のことだった。

遣日スイス使節団の一員としての使命を終えて帰国したブレンワルドは、まずパリやスイス各地で多くの知人、友人、親戚などと会いながら、次のキャリアのための精力的な〝就活〟を行った。社交的な人柄に加え、日本における経験と彼の「日本報告書」が高く評価され、さまざまな仕事の誘いを受けたが、結局ブレンワルドが選んだのはシイベルと2人で経営する日本での共同事業だった。

2人合わせて1万ポンドという自己資本で会社設立を決めた「日本プロジェクト」は、多くの賛同と支援を得て急速に具体化した。彼の〝就活〟がスイス商人たちとの人脈ネットワークを拡大させていたからである。

そして、さらなる融資と将来の取引先を求めて、彼らは世界の商業中心地ロンドンに出かけていった。

11月7日にロンドンに到着した2人は、多くの人の紹介や紹介状の助けを借りてロンドンだけでなく、ブライトン、マンチェスター、ブラッドフォードの、主としてスイス系商社を中心に訪ね歩いて、日本との貿易の可能性を探り、取引先の確保に努めた。日記に記された商社だけでも、ロンドンで7社、マンチェスターで6社、ブラッドフォードで2社、日帰りで訪れたブライトンの会社からも快い回答を引き出した。

そして社名を決定、会社案内を100部発行して、英国や大陸の会社や銀行に送ることを決めて、12月1日にロンドンを後にした。

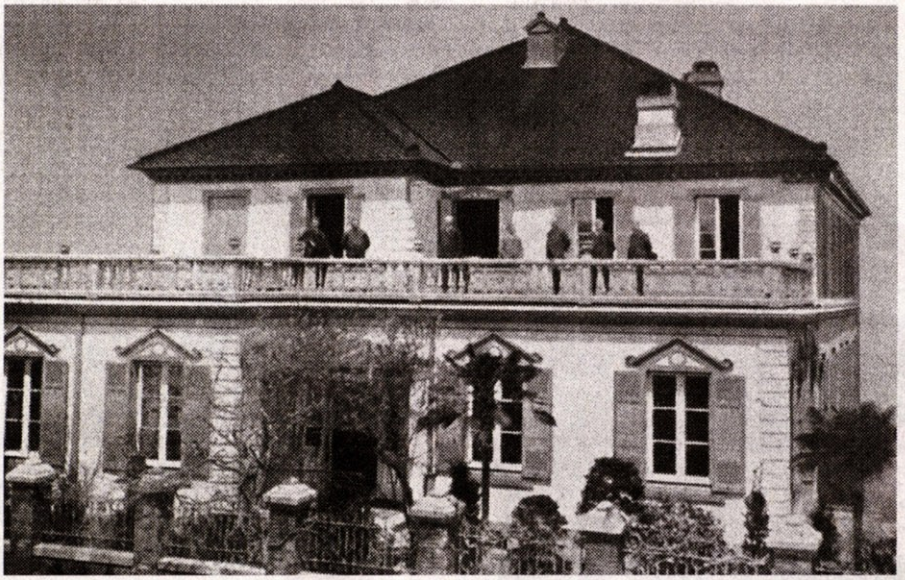
ブレンワルドは、ロンドンで利用したホテルやレストランなどを日記に記している。宿泊したホテルはモーリー・ホテルといい、1831年にトラファルガー広場の南東に建てられた100の客室を持つロンドンの高級ホテルだった。

しかし、ホテルの建物は1921年にサウス・アフリカ・ハウスとなり、その後建て替えられたが現在もサウス・アフリカ・ハウスとして広場の一角を飾っている。また、度々訪れたヴェリーというレストランは、モーリー・ホテルにほど近いリージェント・ストリートにあり、当時の皇太子、後のエドワード7世やディズレーリ、ディケンズらを常連客に持つ有名レストランだった。

コナン・ドイルは、このレストランについて「シャーロック・ホームズがお抱えコックの料理に飽きるとレストラン・ヴェリーからスウィートミート（菓子）を取り寄せた」として作品に登場させている。

起業活動を行ったブレンワルドがロンドンで選んだのは、英国のアッパー・クラスやアッパー・ミドルの裕福な人々が出入りする場所だったのである。

（ブレンワルド研究会会員　大山　瑞代）



横浜のシイベル・ヘグナー社
（1885年撮影　DKSHジャパン株式会社提供）

■神奈川新聞社提供

港都の黎明

ブレンワルド日記から ●7

土地再分配で移転

慶応の大火

1866年11月26日午前9時、横浜末広町（現中区・みなと大通り横浜公園付近）の料理屋から出火した炎は、およそ13時間にわたって市街地の大半を焼き尽くし、午後10時ごろに鎮火した。

この火事で港崎町の遊郭が全焼し、運上所（現神奈川県庁付近に立っていた神奈川奉行所の役所）や日本人居住区の3分の2、居留地の4分の1が焼失した。当時、ブレンワルドは居留地53番に店を持っていたが、彼の店も焼失した。この火災は慶応2年に発生したことから「慶応の大火」と呼ばれ、開港後、最も大きな火災であったため、多くの人が火事の様子を記録した。

ブレンワルドもそのひとりであり、日記には「午前9時15分ごろ、町の一番端で火の手が上がった。火事は強い北風にあおられ瞬く間に町中に広がった。2時間もしない内に日本人の家が100軒以上焼け、火元に近い吉原（遊郭）では60人以上の人が炎に包まれ、遊郭を囲む運河に飛び込み命を落とした」「吉原の火災が鎮火したと思った時、今度はアメリカ領事館の建物が燃え始めた。火は一瞬の間に居留地に燃え広がった。残念ながら僕らも被災し、家と倉庫一杯の商品を失った。居留地では50軒の家が焼け落ち、損害は2000万ﾄﾞﾙに上るといわれている」と被害の大きさを記述している。

「慶応の大火」が発生する以前から横浜に住む外国人は、木造家屋が密集する市街地で大火が発生することに危機感を強めていたが、イギリス領事マイバーグは、火災の翌日さっそく神奈川奉行と会見し、被災地に家屋を再建しないことを申し入れた。また、日本人居住区と居留地との間に防火帯（現日本大通り）を設けることを提案した。

日記にも火災に対する外国人の動向が記され、12月3日には居留地の中に防火帯を兼ねた道路を敷設すること、それに伴い各国領事館や外国商社の土地を再分配するための協議を始めると記されている。この時、シイベル・ブレンワルド商会の移転も協議され、12月10日の日記には居留地90番Aへ移転する話が進んでいるとの記述がある。

やがてブレンワルドが経営する店は、その地番から「甲90番館」と日本人に呼ばれ親しまれるようになるが、そのきっかけは「慶応の大火」であった。

外国人の間では消火体制の強化が話し合われるようになり、12月7日にはドイツ人が消防隊を設置し、ブレンワルドはこの消防隊に20ﾄﾞﾙを寄付した。12月10日には、横浜に住むスイス人が集まりスイス消防ポンプ隊の設置が協議された。

すでに横浜では1864年に居留地消防隊が設置されていたが、大火をきっかけにして新たにいくつかの消防隊が生まれたようである。被災地に家屋を再建しないことを外国人が要求したことにより、遊郭の跡地には大きな公園（現横浜公園）が造成され、焼け出された人が住むための町も新たに建設された。

ブレンワルドの第二の故郷・横浜の町は大きな変貌を遂げることになった。

（横浜開港資料館主任調査研究員・西川　武臣）

慶応の大火時の横浜市街地（横浜開港資料館「絵入りロンドン・ニュース」1867年2月9日）

■神奈川新聞社提供

港都の黎明

ブレンワルド日記から ●8

各地の住民が興味

富士登山

富士山は、今でこそ山岳信仰の色合いは薄いが、平安時代から明治初頭まで神仏一体となった信仰の場であった。特に江戸時代、富士講がブームになると、人々は近隣に富士塚を築き信仰の対象とするとともに、講で登山費用を蓄え、富士登山に出かけた。富士山を崇め、登山へ繰り出す人々の様子は、幕末に日本を訪れた外国人にとって興味を引くものであったろう。

五カ国条約が締結されたが、外国人は開港場周辺に設定された遊歩区域外へ出ることはできなかった。ただし外交官は、職務遂行のため日本国内を旅する権限が認められており、初代英国駐日公使オールコックは、1860年9月、神奈川の英国領事館を出発し、富士登山や熱海の温泉を楽しむ約1カ月の旅に出た。オールコックの富士登山が、外国人初の富士登山であった。

オールコックの富士登山から6年後の1866年8月、スイス総領事ブレンワルドは、富士登山を計画した。彼の日記によると、ブレンワルドが着任早々の神奈川奉行水野良輔に富士登山の計画を伝えると、驚いた水野は、攘夷運動が活発な状況であり安全が保障できないため、起こりうる有りとあらゆる問題を記した手紙をブレンワルドに送り、また4、5日登山実施を延期するよう頼み込んだ。

しかしブレンワルドは、10日以内に横浜に戻ることなどを約束して、8月16日早朝、3人のスイス人とともに馬で富士登山の旅に出た。藤沢で、遅れてきた護衛のための「幕府の役人」5人と合流し、総勢9人の旅であった。

往路はオールコックと同様、東海道を吉原宿まで行き、吉原から大宮、浅間神社を経て山頂を目指すルートをたどった。横浜から箱根峠手前まで馬で行き、箱根峠は徒歩で、箱根から三島までを駕籠で移動し、そこから馬で中宮八幡堂へ至り、そこで荷物を強力に託し、徒歩で登山を行った。

ブレンワルドは、旅の行程について詳しく日記に記しているが、そのほかにも各地で外国人に興味をもつ人々に取り囲まれたこと、駕籠は足が長い外国人には窮屈であること、美しい東海道の街道沿いの様子などを記している。

オールコック一行は登った道を下り、吉原宿を経て熱海へ向かったが、ブレンワルド一行は、須走へ下り、そこから馬で矢倉沢に向かった。日記には「（須走から矢倉沢に至る街道に）僕らの前にヨーロッパ人がまだ一度も来たことがなかったので、住民は大変な好奇心を見せた」と記されている。一行は、矢倉沢・伊勢原に1泊、出発から9日目の8月24日、厚木を経て横浜へ無事帰着した。

この旅は、雨にたたられることが多く、宿泊した山小屋も清潔とはいえず、富士山頂では厳しい寒さに見舞われた。横浜に戻った後、ブレンワルドは日記に「僕らはこの登山旅行を事故もなく終えることができてとてもうれしかった。登山の苦労は本当にかなりのものだった」と安堵の気持ちを記している。

ブレンワルド一行の無事な帰浜を待ち望んでいた神奈川奉行水野良輔も、安堵したことだろう。

（横浜開港資料館主任調査研究員・石崎 康子）

富士登山（オールコック「大君の都」より、横浜開港資料館所蔵）

■神奈川新聞社提供

港都の黎明

ブレンワルド日記から ●9

軍隊近代化背景に

小銃売り込み

1863年、幕府は軍事改革を進める中で、諸外国から大量の武器と弾薬を輸入しようとしていた。そのため、横浜では武器の需要が高まるようになり、幕府は緊急に小銃や大砲を輸入することを決定した。また武器購入を希望する幕府寄りの諸藩に対しては、外国商館との取引を斡旋するとした。こうして横浜は西洋の武器が盛んに取引される港となった。

この時期のブレンワルドの日記にも、ブレンワルドが居留地44番に店を持つオランダ人エドワード・スネルとともに幕府にスイス製の小銃を売り込んでいたことを伝える記述が見られる。スネルは、通商条約締結時に使節団の通訳を務め、条約締結後もスイス総領事館の通訳官を務めた人物である。

また、彼はスイス製の時計などを輸入した商人で、戊辰戦争に際しては、越後長岡藩に武器を斡旋したことでも知られている。おそらくブレンワルドは、スイスと近い関係にあるオランダ人武器商人と共同して小銃の売り込みをしたいと考えたのである。

ブレンワルドが、江戸で外国奉行の江連加賀守と小銃の輸入について話し合ったのは1863年10月3日で、以後、頻繁に会議が持たれている。10月11日には外国奉行の菊池伊予守が小銃見本を見るためにブレンワルドを訪れ、後装（元込め）小銃やエンフィールド銃などの価格が提示された。

菊池は15日にも再度来訪し、同席したスネルはアメリカ製の後装小銃を幕府に販売した。また、18日には老中がスイス製の小銃を見たいと言っていること、幕府軍を同じ小銃で装備したいと考えていることが伝えられた。

その後もブレンワルドは小銃購入について幕府役人との折衝を続け、1864年4月8日には、歩兵奉行の河野伊予守と歩兵奉行並の富永相模守と会見し、スイス製のベッテルリ銃やマルティニ銃の価格について協議した。日記によれば、ベッテルリ銃は1丁あたり25ドル、マルティニ銃は27ドルであった。

購入の丁数について具体的に記述はないが、幕府歩兵隊を率いる歩兵奉行が交渉相手であったことから、当時の幕府歩兵隊の人数分にあたる2万4千丁程度は購入する予定であったと思われる。

河野が率いる歩兵隊は、幕府が1862年に創設した近代的な軍隊で、兵士には旗本の支配地の農民も多く含まれていた。彼らは江戸の各所に置かれた屯所で訓練を受け、隊列行進や西洋銃の扱い方を伝授された。歩兵隊は、天狗党の乱の鎮圧や長州征討に動員され、最新式の武器を備えた軍隊として活躍した。

スイス製の小銃の購入計画は、こうした軍隊の装備を一層強化することが目的と考えられるが、最終的にスイス製の小銃は歩兵隊に採用されなかった。その理由として、5月10日の日記は、歩兵が後装小銃の扱いに慣れていないことを挙げ、売り込みの努力が無駄になったと記している。

いずれにしても横浜を舞台に激しい武器売り込み競争があったことは間違いない。

（横浜開港資料館主任調査研究員・西川　武臣）

幕府の歩兵隊（横浜開港資料館蔵「絵入りロンドン・ニュース」1863年9月26日号）

■神奈川新聞社提供

港都の黎明

ブレンワルド日記から ●10

オペラ鑑賞に熱中

芝居通

ロンドンを訪れたブレンワルドが利用したホテルやレストランが、実は英国の富裕層が好んで出入りした場所だったことはすでに紹介した。

また、彼の富士登山に挑んだ顚末もすでに紹介されたが、当時「登山」が西洋の富裕層のスポーツだったことを考えると、彼が富士登頂に情熱を燃やしたことは当然かもしれない。さらに、西洋の知的富裕層の多くが享受した娯楽のひとつ、演劇やオペラの鑑賞を好んだことにおいても、彼は例外ではなかった。実際、彼は芝居通（theater-goer）だったのである。

日本に到着する以前にもすでに、寄港した土地で出会った芸能や見せ物などを日記に書き留めている。その後も船・艦内やその他さまざまな場所で催される素人の演劇を見たり、歌舞伎など日本の芸能や催しを見に出かけたことを書き残している。

しかし、何といっても彼が愛したのは西洋の演劇でありオペラだった。横浜では仕事仲間や友人たちと余暇を十分に楽しんでいたブレンワルドだが、西洋の本格的な観劇の楽しみを奪われた暮らしの中で、演劇やオペラをいかに恋しく思っていたかは想像に難くない。

彼が欧州への帰路立ち寄ったサンフランシスコやニューヨークで、さらにパリやスイス各地で、飢えを癒やすかのように頻繁に劇場に通ったことを記す日記から、彼の熱い思いが伝わってくる。

1864年8月末、1年数カ月の日本滞在を終えて帰国する途中、サンフランシスコ滞在の18日間に、劇やサーカス、曲芸などに6回も出かけている。寄港がわずか1週間のニューヨークでも、到着当日に劇を見ているし、出港2日前にヴェルディの「トロヴァトーレ」を見て、「3年前にローマで聴いたカロッチ・ズッキが歌う」と書き添えている。

時は南北戦争終結前のことである。しかし、1867年の帰国時に立ち寄ったニューヨークでは、観劇の機会も多くきっと満足したことだろう。10月9日到着当日の「観劇」に始まり、11日「観劇」、12日「フランス劇場、リストリがマリー・アントワネットを演じている」、14日マイヤベーヤのオペラ・ユグノー「プリマドンナのパッパは良い出来」と記している。その後パリに到着すれば2日後にはシャトレ劇場で「シンデレラ」、翌日劇場名は不明だが「ブノアトン家」を、その3日後にはベリーニのオペラ「夢遊病の女」、そこに「カルロッタ・パットが歌う」と書き添えるなど、まさに水を得た魚のようである。

さて、1870年12月になると、横浜にも西洋式劇場「ゲーテ座」が本町通りに登場する。こけら落としはアマチュア劇団による居留地に人気のあった劇2本、当然のことながら、早速芝居好きのブレンワルドは出かけている。開場して1年の間に、コンサートやアマチュア劇団公演など8種類のプログラムが組まれたが、そのうち五つを彼は見ている。

できたばかりのゲーテ座にtheater-goerのブレンワルドがどれほど満足したのだろうか。彼の日記にコメントはない。

（ブレンワルド研究会会員・大山 瑞代）

開場直後の本町通り68番のゲーテ座（「ファー・イースト」1870年12月16日号より、横浜開港資料館所蔵）

■神奈川新聞社提供

港都の黎明

ブレンワルド日記から ●11

利権めぐり競願に

初めてのガス灯

1872年10月31日、横浜の日本人街においてわが国最初のガス灯が点火された。これについては、当初はドイツ商社が居留地における免許を申請したが、対抗して高島嘉右衛門らの日本社中が出願して競願となり、神奈川県は双方の注文口数の多い方に免許するという方針をとり、結局口数の多かった日本社中が免許を獲得した。外国側に経済利権が奪われるのを防いだ快挙として記憶する向きが多いであろう。

ただし実際には、外国対日本というすっきりした対立であったわけではない。高島はかねて親密な取引先であったブレンワルドに助力を要請しており、その依頼によって1870年12月31日朝、上海仏租界のガス商会頭取プレグランが上海から到着、その2日後の正月に、ブレンワルドは「一日中ガス設備の件で高島とプレグランと仕事」している。

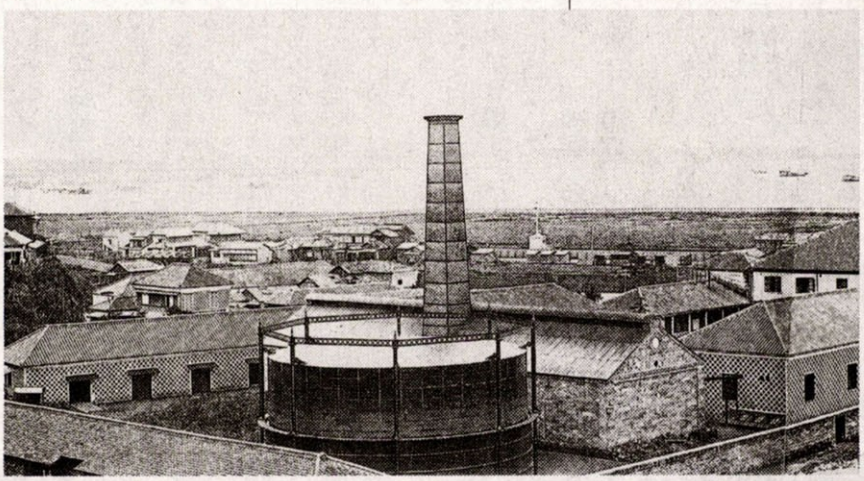
日本社中が2月に公表した「仕様書」では、ウォルシュ・ホール商会ウォルシュ、オランダ領事ファン・デア・タック、スイス総領事ブレンワルドの3人が「受託者」（保証人）になっているが、2月4日、この3人と高島らが協議し、「会長は日本人に任せるが、われわれ供託者3人のみが支配人とヨーロッパ人雇用者全員の人事権を持ち日本人は一切干渉できない、ということに合意した」という。

免許については、3月31日、県知事も1票をもって参加する領事会議で決定されることになった。高島は当然ながら単独免許を望んでいたが、ブレンワルドが前日、井関盛艮（もりとめ）県知事を訪ねたところ、「高官（寺島外務大輔）は居留地においては両会社に営業許可を与えることに決めた」と聞いており、日本政府もこの時点では両社免許の方針だったのである。

当日、ブレンワルドは両社免許を提案、追加申し込みを合わせるとドイツが上回るとして単独免許を主張するドイツ領事ライスとこれに同調するデンマーク領事バビエルを押し切って、県知事を含む賛成6人の多数で可決された。ライス商会が撤退したのは、免許が得られなかったからではなく、2社競合では採算が取れないとみた自発的なものだったのである。

伊勢山下のガス工場（現中区花咲町・本町小学校敷地）建設にも曲折はあったが、プレグラン指揮のもと、72年10月28日の日記には「午後、ガス工場で初めて火が入れられる」と記されている。ブレンワルドとプレグランは高島とともに、これと並行するように東京会議所によるガス灯建設にも関わっていき、横浜より2年遅れの12月に東京でも点灯され、その2年後には東京府に移管された。

（横浜開港資料館館長 高村 直助）



ガス会社（横浜都市発展記念館所蔵）

港都の黎明

ブレンワルド日記から ●12

天皇 汽船で初巡幸

「海の日」の由来

現在7月第3月曜日と定められている国民の祝日「海の日」と横浜との関わりは、どのくらい知られているだろうか。「海の日」は1995（平成7）年制定時には7月20日であり、それは41（昭和16）年制定の「海の記念日」を継承したものであった。ではなぜ7月20日なのか。

1876（明治9）年明治天皇は東北巡幸の最後に北海道に渡り、7月18日午前灯台視察船明治丸で函館をたった。予定では20日午前には横浜に着くはずであったが、荒天のため遅れて横浜上陸は夜遅くなり、東京からの出迎えの者たちもいったん引き揚げた。

天皇来浜には前例があり、鉄道開通式典の際には領事たちが振り回された。72年10月8日の会議でイギリス領事が短い式辞を述べることを決定、9日には当人の原稿を検討して「暗唱して来いと指示した」。ところが14日（明治5年9月12日）当日の祝辞はイタリア公使の担当になってしまった。日記には、「快晴の天気の下ミカドによる鉄道開通式。そのあとボードワンのところで領事の昼食会」とだけ記されている。

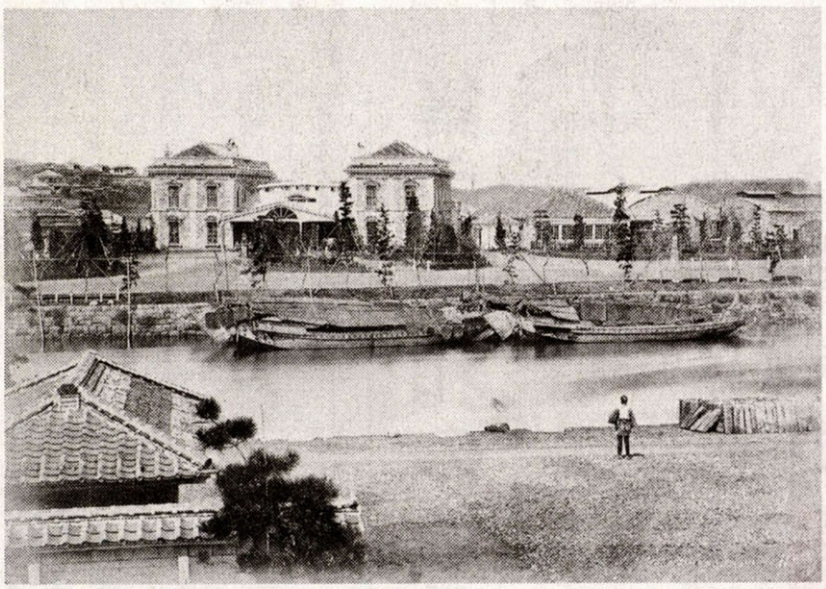
さて7月20日である。「ミカドが今日北日本からお帰りになる日。ロバートソン〔英領事〕の特別な要求で、県に領事団も出迎えに参加するべきかと聞いたら、そのとおりと言う答えであった。領事たちは町会所で待機したが、無駄足だった。ミカドは午後10時に着いてすぐ伊勢山に向かったからだ」。出迎えのためガス灯で飾られた町会所に待機したのに、待ちぼうけに終わったのである。

伊勢山（現西区宮崎町）には、この前年三井組所有地を買収して建設された伊勢山離宮（横浜御用邸）があり、天皇はそこに1泊したのである。81年にはここにハワイのカラカウア国王も宿泊したが、その後85年に払い下げられた。

翌21日「各国領事は鉄道の駅でミカドに紹介されるので、8時から9時の間に駅に行くべしという回覧が午前7時ごろ廻ってきた。大方の領事は断り、実際に行ったのは僕とケズウィック〔ジャーディン・マセソン商会〕、ペリカン〔ロシア副領事〕（彼は制服）だけだった。あとでウィルキンソン〔イギリス代理領事〕が平服でやってきた。僕らはミカドが列車に乗り込むとき権令〔県副知事〕野村〔靖〕によって紹介された」。前夜遅くの後のことで、領事たちの歩調はそろわなかったが、ブレンワルドは何とか紹介されたようである。「明治天皇紀」は横浜駅頭で「謁を賜」った者の中に、「瑞西露西亜葡萄牙各国領事」を記している。

汽船による天皇航海の最初であったことから記念日が制定されたのであり、明治丸は現在越中島の東京海洋大学キャンパスに保存されている。ただし天皇は、船酔いで絶食した苦い経験によって、以後は船旅を好まなくなったという。

（横浜開港資料館館長 高村直助）



横浜駅と伊勢山離宮（左側丘の中腹にある洋館、横浜開港資料館所蔵）

■神奈川新聞社提供

港都の黎明

ブレンワルド日記から ●13

借地権 競売で入手

築地居留地

日米修好通商条約で定められた江戸開市は、諸事情から再三延期されていたが、江戸が東京と改称されて4カ月後の1869年1月1日（明治元年11月19日）、築地（現中央区明石町）が外国人に開放された。

しかし、武家屋敷撤去と土地造成に手間取り、借地権の競売が始まったのは翌年6月であった。この時シイベルは、隅田川河口部に面した5番の借地権を入手した。11月30日の日記にブレンワルドは「昨日から江戸の新しい僕らの家でオークションが始まり、かなりの来訪者があったようだ」と記しており、商業活動を始めている。

71年9月30日の第2回競売で河口部からは奥まった51番・52番を落札した。これも名義はシイベルで、当時の日記では、シイベルはコに向かうが、その2日前に以上の区画はいずれもブレンワルドに譲渡されている。

1875年ごろとみられる築地居留地地図によると、居留地は1番から52番までで、5・50・51・52番の4区画の借地権者が「瑞○ブレンワルト・シーベル」とされており、各区は（1・2・21・22番）、ペルー公使館（31番）が記されている。

52番がオフィスと居住の場所であった。1874年6月22日には、この年11月破産する小野組の経営に当たっていた古河市兵衛が52番を訪ね、米・生系担保の融資を依頼している。同年12月24日には「江戸に行き、クリスマスイブはひっそりとミュラー、マーティン博士と52番で過ごす」と記している。

ミュラーはスイス人で、前橋製糸場（1870年）・築地小野組製糸場（71年）・工部省勧工寮製糸場（73年）建設に従事し、イタリア式製糸技術の指導に当たった人物である。

主に東京にあって時々横浜に戻り、ブレンワルドはその逆であった。

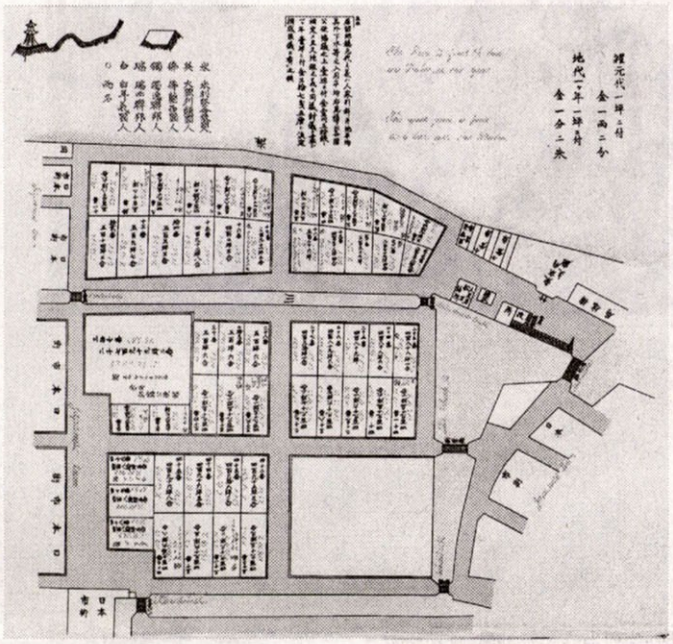
しかし72年5月25日、シイベルは後事をブレンワルドに委ねてグレート・パブリック号でサンフランシスコ（1・2・21・22番）、ペルー公使館（31番）が記されている。

52番がオフィスと居住の場所であった。1874年6月22日には、この年11月破産する小野組の経営に当たっていた古河市兵衛が52番を訪ね、米・生系担保の融資を依頼している。同年12月24日には「江戸に行き、クリスマスイブはひっそりとミュラー、マーティン博士と52番で過ごす」と記している。

ミュラーはスイス人で、前橋製糸場（1870年）・築地小野組製糸場（71年）・工部省勧工寮製糸場（73年）建設に従事し、イタリア式製糸技術の指導に当たった人物である。

500坪（約1650平方㍍）前後である。

スイス総領事館は51番に置かれた。これ以前にドイツ、スペインなどもここに領事館を置いていたが、この地図にはアメリカ公使館



築地居留地地図（1875年ごろ、東京都「都市紀要4 築地居留地」より）

その後77年6月22日にはアーレンス商会のシュミットの依頼で、お雇い教師であった化学者ワグネル教授に「大きい方の日本家屋の部屋を月額20ドルで貸す」ことにしたという。52番には日本家屋と池があり、イチゴやサクランボも採れたとも記している。なお50番は「銀行の担保とする商品を50番に運ばせる」（76年8月4日）とあり、倉庫として使用していたようである。

（横浜開港資料館館長 高村直助）

■神奈川新聞社提供

港都の黎明

ブレンワルド日記から

●14

ネットワーク活用

商社訪問

ブレンワルドの日記は、日本滞在中の生活に加え、彼がヨーロッパと日本を行き来した際の旅路についても、記録している。

今回は、少し時間を巻き戻して、彼が1863年にスイス遣日使節団の一員として初来日した際の旅路を、振り返ってみることとしたい。日記によると、その際のルートは次のようなものであった。ベルン→マルセイユ→アレクサンドリア→スエズ→アデン→ボンベイ→ポワン・ド・ガレ→ペナン→シンガポール→サイゴン→香港（広東・マカオに旅行）→上海→長崎（→横浜、江戸へ）。出発が1862年12月、長崎到着が翌年4月なので、約5カ月間の旅路である。

この旅程中、ボンベイ以東になると、ブレンワルドは寄港地に上陸するたびに、その地のドイツ系・スイス系商社を、たいてい紹介状を手にして訪問して回り、各商社の経営者や社員のドイツ人・スイス人と交流している。

例えばボンベイでは、①フォルカート社②A・H・フシュケ社③ジッグ社―という商社を訪れている。このうち①ではギルデマイスターというドイツ人社長に歓待され、その下で働く2人のスイス人社員に会う。②ではプロイセン、ブレーメンなどの領事を務めるグンパートという社長に迎えられ、夕食に招待されている。

シンガポールでは、約3週間の滞在期間中、さらに多くの商社を訪問している。①ベーン・マイヤー社②プットファルケン・ライナー社③ビュージング・シュレーダー社④ラウテンベルク・シュミット社⑤ツァップ・バウアー社―ほかである。

ブレンワルドは各商社で、たいてい1～2名のスイス人社員に会い、「総じてここではドイツ人やスイス人の社員はずいぶん贅沢をしている」という観察を記している。また同港には「ドイツ人クラブ」があったらしく、ブレンワルドらは、晩はそこで食事をしてケーゲル（九柱戯、ボウリングの原型）に興じるか、上述の商社長宅での会食に招待され、滞在期間の後半は⑤の経営者ツァップ氏宅に寄宿している。

香港や広東、上海でも、ブレンワルドの商社訪問は続き、①ヴィルヘルム・プスタウ社②ジームセン社③カルロヴィッツ社④ブルジョウ・ヒュープナー社⑤フィールツ・バハマン社―ほかを回っている。このうち①の上海支店では、プロプスト氏なる人物に会い、同氏が横浜に所有する空き家をスイス使節団が自由に使ってよいという申し出を受け、②では、横浜で商社（シュルツェ・ライス社）を経営するシュルツェ氏に会っている。

来日後も、ブレンワルドは長崎や横浜で、①クニフラー社②テキスター社③シュルツェ・ライス社―などのドイツ系商社とコンタクトをとり、さまざまな便宜を与えられた。例えば彼は、横浜滞在中、数カ月にわたって、①の横浜支店を経営するギルデマイスター氏宅に寄宿し、同家を火事で焼け出されて以降は、③のライス氏宅に避難した後、上述のプロプスト氏の空き家に越した。

ブレンワルドの極東への旅路は、アジアに展開したドイツ・スイス系商人のネットワークに支えられていたと言えよう。おそらく、これら商人の出身地は、ハンブルク、ブレーメン、スイスなど、さまざまであったろうが、ドイツ語という共通言語が、彼らをつなげていたものと考えられる。

（ブレンワルド研究会会員　福岡　万里子）

1863年に横浜居留地235番に設立されたドイツ人クラブ、クルプ・ゲルマニア（明治初期撮影、横浜開港資料館所蔵ハラルド・オール氏寄贈スティルフリード製作写真帳より）

■神奈川新聞社提供

港都の黎明

ブレンワルド日記から

●15

技術伝承の支えに

製糸工場誕生

シイベル・ブレンワルド商会といえば、生糸を輸出し、日本の製糸工場の誕生に深く関わった外国商館である。官営の富岡製糸場が有名だが、日本初の製糸工場は1870年に前橋藩が設立したごく小規模な前橋製糸所であった。

前橋藩は洋式製糸工場の設立を企て、シイベル・ブレンワルド商会（以下SB商会）を介してスイス人技師ミュラーを雇用。ミュラーは前橋へ来て同藩の速水堅曹とともに設立に当たり、6人繰りの工場を完成させた。前橋製糸所は伝習の場となり、速水は日本人初の製糸技師となった。

生糸の市が立つ前橋は、開港前から東日本最大の生糸の集散地だった。開港後生糸輸出の開始とともに横浜への出荷が盛んになり、69年に前橋藩は御用商人を使って生糸専売を始めた。前橋商人を説き伏せ、前橋に集まる生糸を藩の横浜店に送り、独占的に外国商館に売り込もうとした。

シイベル・ブレンワルド商会はこの企画に深く関わり、前橋製糸所もその一環だったらしい。しかし良質な生糸を出荷できなかった前橋藩の専売事業は1年で挫折。廃藩置県によって前橋製糸所も藩の所有から離れ、発展することはなかった。

一方、粗製乱造による生糸輸出不振への対処を迫られた政府は、外国側の助言を受け入れて欧州式大工場の設立を決定。バビエル商会のガイセンハイマーの斡旋によって、フランス人技師ブリュナーらを雇用して富岡製糸場を建設し、72年11月から器械製糸技術の伝習を始めた。

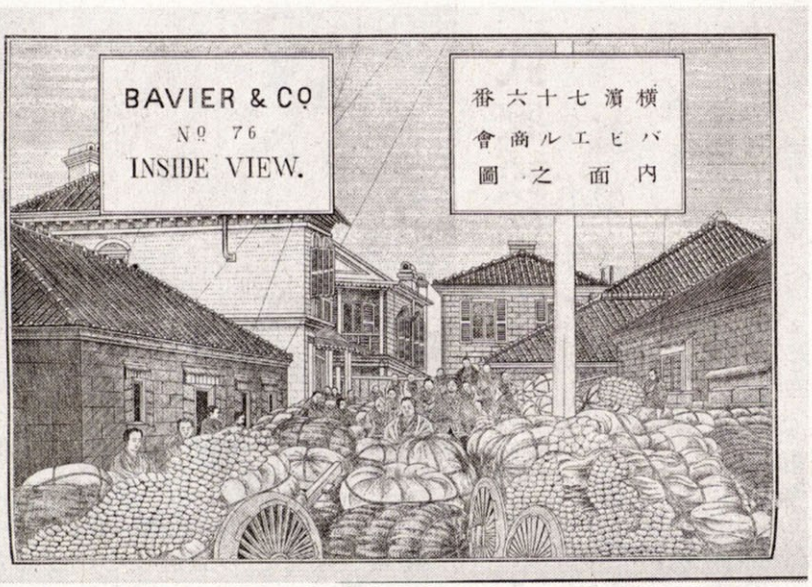
このように横浜の外国商館は日本生糸の改良策を提案し、おのおのが諸藩や政府に積極的に働きかけた。残念ながら現在ブレンワルド日記は、前橋藩などとの交渉が書かれていたはずの70年6月以前を欠く。

しかしそれ以降にも、日本の生糸政策にブレンワルドらが深く関わっていたことを示す記述が諸所に見られる。たとえば廃藩置県から間もない71年9月17日――「古河が来て話をした中で、ガイセンハイマーが古河と僕ら（シイベル・ブレンワルド商会）と3者で生糸業務をやらないかと持ちかけたそうだが、そんな話には乗らない。古河はウォルターに、もう3万から5万ドル貸さないかと聞いたそうだが、ウォルターは僕らがすでに前貸しした5万ドルで当分十分だと答えていたそうだ」

古河はのちに古河財閥を創る古河市兵衛で、当時は三井と並ぶ政商であった小野組の実質的経営者。小野組は大蔵省の渋沢栄一らのプランに沿って、築地製糸場や長野県上諏訪の深山田製糸場を設立した。

これらの小野組の工場は、生糸産地に製糸工場が設立される契機となった。ウォルターはシイベル・ブレンワルド商会に勤めていたイギリス人で、のちに親日家の「ワタリさん」として知られた。日本に製糸工場が登場する頃の、日本政府と日本商人と外国商館の特殊な協力関係、それもまた横浜の果たした歴史的役割の重要な一面であった。

（日本女子大学教授 井川 克彦）



バビエル商会（「日本絵入商人録」より、横浜開港資料館所蔵）

■神奈川新聞社提供

港都の黎明

ブレンワルド日記から ●16

横浜移転で夜会も

領事館

1859年の開港を取り決めた通商条約では「神奈川」を開港することになっていたが、この「神奈川」の場所をめぐって、日本と外国との間で食い違いが生じた。

「横浜は神奈川の内」だとして横浜開港を進める幕府に対して、外国側は「神奈川とは神奈川宿のことだ」として横浜開港に反対し、神奈川宿の寺院を借りて領事館を開設した。アメリカは本覚寺、イギリスは浄滝寺、フランスは慶運寺、オランダは成仏寺という具合に。オランダはのち長延寺に移転した。

しかし、外国商人たちは横浜に住み始め、しだいに貿易も盛んになっていった。幕府は各国に対して領事館を横浜に移すよう要請したが、まずオランダがこれに応じ、1861年1月、オランダ側の設計によりヨーロッパの建築法を採用することを条件に移転を正式決定した。そこで幕府は領事館用地として洲干弁天社地先の海面を埋め立て、翌1862年4月、土地と建物をオランダ側に引き渡した。

「横浜市史稿・風俗編」には、移転に際して、「交際上手」な領事ポルスブルックが夜会を開催した、これが日本で行われた「夜会の初め」だと記されている。

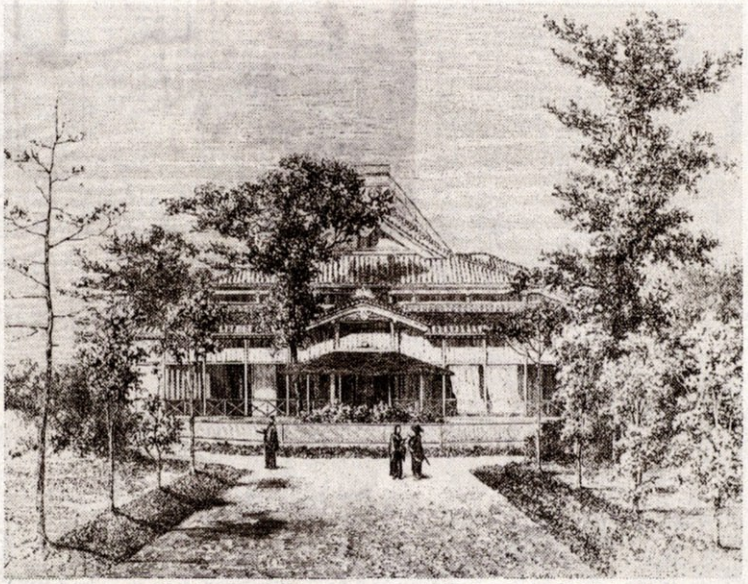
しかし、「横浜市史稿・風俗編」が依拠したと思われる「横浜沿革誌」には、この夜会は移転の翌年、1863年に行われたと記されている。そうだとすれば移転とは関係がない。事実はどうなのか？ この疑問に答えてくれる記述がブレンワルドの日記の中にあった。1863年9月4日の日記に次のように記されている。

「今晩はいよいよポルスブルック氏の大舞踏会だ。午前中天気が悪くなって雨が降ったので、舞踏会はだめではないかと皆心配したが、午後にはまた天気が回復し、晩には庭中に旗のストックなどが立てられ、すばらしいイルミネーションになった。旗のストックでは主にオランダの色がとてもきれいだった。しかし11時ごろには土砂降りになって庭の灯火が全部消えてしまった。しかし雨は長続きしなかった。160人の紳士（外交官、軍人や参加者たち）に対し婦人はたった10人だけで、しかもなかなか来ない人がいたので、ダンスが始められたのは11時半になっていた。夫人の大半はイギリス人であった。僕はジャクモ夫人と最初のカドリールとポルカを踊った」

この記述は「横浜沿革誌」の「内外貴顕縉紳ヲ会シ、一大祝宴ヲ開ク、此時同国ノ国旗ヲ画キシモノ、又ハ紅白ノ提灯数千個ヲ門内ヨリ西柵ナル国旗竿等ヘ点綴ス」という記述と一致する。小さい丸い提灯（ちょうちん）のことを球灯というが、「横浜沿革誌」は「本邦ニ於テ祝日宴会等ニ多数ノ球灯ヲ点スルハ之ヲ嚆矢トス」と締めくくっている。ブレンワルドの記した「すばらしいイルミネーション」がこの球灯のことだろう。

ブレンワルドの日記によって、夜会の行われたのが1863年9月4日だったことがはっきりした。領事館の移転から1年半もたっている。やはり「横浜市史稿・風俗編」の記述は誤りだった。

（元横浜開港資料館調査研究員・斎藤　多喜夫）



オランダ領事館（アンベール「幕末日本図絵」より、横浜開港資料館所蔵）

■神奈川新聞社提供

港都の黎明

ブレンワルド日記から ●17

ベアトが写真撮影

使節団の江戸散策

スイスの使節団長アンベールの著作「幕末日本図絵」には、14章から19章にかけて、江戸についての長い記述がある。これを読むと、宿舎の長応寺に滞在しながら、ゆっくり江戸市中を散策したように受け取れる。しかし、ブレンワルドの日記によると、実際にはそうでなかったようだ。

使節団が長応寺に入ったのは1863年5月28日だが、時あたかも生麦事件の解決をめぐるイギリスと幕府の交渉が難航しており、世情は騒然としていた。

江戸は危険だとして、日本側は横浜へ戻ることを要求し、使節団は夜になると船で宿泊するような生活をしばらく続けたのち、6月8日に横浜に退去した。6月24日になって幕府が賠償金の支払いに応じたので、最悪の事態は避けられたが、使節団との交渉は横浜で行われることになった。

使節団が再び江戸を訪れたのは翌1864年2月5日、条約の調印のためだった。一行が江戸市中を散策したのはこの日と翌6日の2日間だけで、6日の夜にはもう横浜に戻っている。

「幕末日本図絵」によると、長応寺には写真家ベアトの「小さな仕事場」があり、使節団に同行して、江戸市内を撮影して回った。現存するベアトの江戸の写真のいくつかは「幕末日本図絵」の記述と符合するので、この時に撮影されたものと考えられる。

三田の綱坂の写真もその一つで、「幕末日本図絵」にも版画に直して収録されている。ただし、ベアトもアンベールもこれを高輪の薩摩藩下屋敷の写真だと誤解している。写真を整理した際に別の写真と入れ替わってしまったようだ。

幕末の条約のもとでは私人が自由に江戸を散策することは認められていなかったから、ベアトは外国の代表と一緒でなければ撮影できなかったのだが、その代表がスイスの使節団だけだったとすると、2日間でそんなに多くの写真を撮れただろうか？　ブレンワルドの日記がこの疑問に答える手がかりを与えてくれる。

1863年8月17日の日記によると、オランダ領事ポルスブルックがベアトとともに江戸へ向かったという。ベアトの江戸の写真の中には、ポルスブルックに同行して撮影したものもあるのではないか。

長応寺はオランダの代表が江戸滞在中に宿舎として利用していたので、長応寺の中のベアトの仕事場はその際にも役立ったことだろう。

ブレンワルドの日記には他にもベアトが登場する。その一つは1863年10月16日、ブレンワルドがベアトのもとを訪ねると、14日に横浜で何者かに殺害されたフランス軍士官、「可哀相（かわいそう）なカミュ」の遺体の写真があった、というもの。11月9日には、ベアトに肖像写真を撮ってもらっている。

（元横浜開港資料館調査研究員・斎藤多喜夫）

江戸綱坂（ベアト撮影、横浜開港資料館所蔵）図版は江戸綱坂（右手の塀は島原藩深溝家中屋敷＝現慶応大学。1段上が松山藩久松家中屋敷＝現イタリア大使館、左手の木立の中が会津藩保科家下屋敷＝現三井倶楽部）

■神奈川新聞社提供

港都の黎明

ブレンワルド日記から ●18

一家の不幸 契機に

野犬取締条例

ブレンワルドの良い相談相手だったスイス人にジャクモという生糸の専門家がいる。イギリス領事が1861年末現在で調査した記録によると、当時45歳、夫人のアントワネットは33歳、娘のテレーズは8歳、息子のジェームズは3歳だった。子どもはいずれもロンドンで生まれている。おそらくジャクモはロンドンで貿易の経験を積み、まだ日本とスイスが条約を結んでいなかった当時、イギリス人として横浜へやってきたのだろう。

一家を不幸が襲ったのは1865年6月11日のことだった。ブレンワルドの日記には次のように記されている。

「ジャクモの息子（5歳6カ月）が今日午後2時と3時の間ごろ逝去。狂犬に噛まれた傷がもとで亡くなったそうだ。ジャクモ夫妻はまったく途方にくれており慰めようもない。その子は本当に可愛い少年だったから無理もない」

遺体は山手の外国人墓地に埋葬されたはずなのだが、関東大震災で地中に埋没してしまったためか、墓石はどこにも見当たらない。

当時外国人居留地では犬が野放しになっていたらしい。6月9日に発足したばかりの居留地の自治組織である参事会は、条例第1号として野犬取締条例を制定した。しかしこの条例が第2の不幸を生むことになる。

参事会の条例は領事団の批准を得る必要があるのだが、領事団は参事会と協議することなく、条例案を変更してしまった。詳細は不明だが、領事団が制定した条例は、参事会では11対3で否決された少数意見と同じだったという。

8月21日、この問題を討議するため、居留地に借地を持つ居留民によって構成される借地人会議が開かれた。会議の席で参事会議長のアメリカ人ショイヤーは、領事団を非難する大演説を行い、終わって席へ戻ると発作を起こした。参事会の財務委員として同席していたヘボン博士が治療に当たったが、その甲斐もなく、その場で死去した。

ブラックはその著作「ヤング・ジャパン」の中で、ショイヤーの演説の内容を伝えている。「現在われわれは領事団から特許状を受けている、われわれはその特許状の条項に一致する条例の作成をしようとしている。そしてこれらの条例が批准を得るため領事団に廻されると、それが変更をされて、会議の意図や意向と正反対なものになって、自治体の条例として公布される」と。

翌日の「デーリー・ジャパン・ヘラルド」紙は、ショイヤーの死を悼む記事の中で、「傑出した個性の持主はみんなそうだが、強力な友人と敵の両方を持つ男だった」と述べている。そうとう強烈な個性の持ち主だったようだ。山手の外国人墓地にある墓碑によると、享年65歳だった。

（元横浜開港資料館調査研究員・斎藤多喜夫）

犬を撃ったのは誰か（「ジャパン・パンチ」1865年10月号より、横浜開港資料館所蔵）図版は犬を撃ったのは誰か（野犬取締条例をめぐるトラブルを風刺した漫画）

■神奈川新聞社提供

神奈川新聞 2011.03.03（木）

港都の黎明

ブレンワルド日記から ●19

漫画通じ世相揶揄

「ジャパン・パンチ」

「ジャパン・パンチ」はイギリス人の画家ワーグマンが1862年に刊行を始めた漫画雑誌で、おおむね月1回発行された。最終号は1887年3月号、約25年間にわたり、220冊余を刊行した。もっとも大きな特徴は、居留地で実際に起きた事件を題材とする漫画が多く、実在する居留民の似顔絵が登場することだ。つまり読者の似顔絵が登場するという、たいへんユニークな雑誌だった。

25年間にわたって刊行されたのは、もちろん多数の愛読者がいたからだ。その一人、イギリス人のモスは、古参居留民の回顧談を多数収録した「ジャパン・ガゼット横浜50年史」のなかで、「私たち全員が彼の鮮やかなスケッチと洒落を長い間楽しんだ。彼は、本当に温和で親切な人物だった。『パンチ』に掲載されたスケッチは巧みで、要を得ていたし、初期の横浜の歴史を表しているので、古い住人たちは珍重した」と述べている。

しかし「不安」くらいでは済まない人もいた。1866年、フランス公使ロッシュは幕府に接近し、幕府が進めていた横須賀製鉄所の建設をバックアップする一方で、生糸貿易で有利な地位を占めようとしていた。その片腕として活躍していたのがカション神父だが、その動きを快く思わない人々もいた。

ワーグマンもその一人だったらしく、この頃の「ジャパン・パンチ」にはカションを揶揄する漫画がしばしば掲載されている。7月号にはロッシュに後押しされるカションが描かれており、「公使に支援されたメフィストテレス（悪魔のこと）」と記されている。

同じくイギリス人のモリソンも「横浜の思い出」という回顧談の中で、「『ジャパン・パンチ』を、人々はたいへん楽しみにしていた。しかし、ワーグマンの題材として自らが描かれそうな人には不安もあった」と述べている。

ブレンワルドの7月30日の日記によると、「ジャパン・パンチ」で繰り返しカションが攻撃されることに激怒したフランスの軍人が、ワーグマンに決闘を申し入れ、ワーグマンが応じなかったので、鞭で痛めつけたという。こうなるとも う漫画を描くのも命がけだ。

ブレンワルドもワーグマンに揶揄された一人だった。同じ頃、170番地の土地をめぐるブレンワルドとリンダウの対立が激しさを増していた。「ジャパン・パンチ」の5月号には、居留地で出ていた英語の新聞「ジャパン・ヘラルド」にブレンワルドが載せた記事を揶揄したと思われる漫画が掲載されている。

タイトルは「大馬鹿共和国の感謝状」、酒瓶の胴に時計の頭のついたのが「チージー（Cheesy）国総領事」、「チージー」とは「安っぽい」という意味で、これがブレンワルド、左手の人物がリンダウであろう。ブレンワルドやその支持者にはとても笑えない漫画だ。

（元横浜開港資料館調査研究員・斎藤多喜夫）

大馬鹿共和国の感謝状（「ジャパン・パンチ」1866年5月号より、横浜開港資料館所蔵）図版は、大馬鹿共和国の感謝状（時計と酒瓶の形をした総領事がリンダウに向かって「おまえの役目は終わった。どこかへ行ってしまえ」と言っている）

港都の黎明

ブレンワルド日記から ●20

浪士襲撃で犠牲者

交遊

スイス人ブレンワルドは、1863年6月8日、江戸から横浜へ戻った。当時の横浜は、前年に生麦村（現横浜市鶴見区）で起きた薩摩藩士によるイギリス人殺傷事件（生麦事件）に対して幕府が非を認め、賠償金支払いを約束する直前であった。

初代駐日プロシア領事、フォン・ブラントの夕食会に遣日使節団団長のアンベールとともに招かれたブレンワルドは、そこで初代駐日フランス公使ド・ベルクールを知った。その場にはフランス海軍提督ジョレスや、2人のフランス人神父らも来ていた、と日記にある。

共通語のフランス語を通じて、ブレンワルドはイギリスやアメリカの公使たちよりもスイスの隣国、フランス人たちと交流を深めていく。

ド・ベルクールとジョレスは、その頃イギリスと共同して生麦事件後の横浜外国人居留地の防衛を行えるよう、幕府と交渉を重ねていた。事件の当事国であるイギリスの代理公使ニールや海軍提督クーパーよりも積極的に防衛権の移譲を主張した。

ブレンワルドの日記にも「ジョレス提督は今日（6月22日）各領事に回覧文を渡したが、そこにはクーパー提督が多分召還されるので、自分が横浜でできる限りの手段を使って『最後の最後まで』防衛に徹する、と書いてあった」という記述がある。またアンベールが、横浜に住むスイス人保護に尽力してくれていることに感謝し、ジョレスの断固とした措置を称賛する書簡をド・ベルクールに送った、とも記されている。

6月末、上海からフランス陸軍アフリカ猟歩兵第3大隊が横浜防衛のため来駐してきたが、10月14日、所属の下士官が横浜近郊の井土ケ谷（現横浜市南区）で攘夷派浪士に惨殺された（井土ケ谷事件）。犠牲者はカミュ少尉、21歳であった。日記によると「午後4時頃、外国人居住区はまたヨーロッパ人が殺されたという知らせで驚愕した」。

25歳のブレンワルドとカミュは年齢が近いこともあって意気投合したのだろう。「カミュはほとんど毎晩のように僕らのところにやって来た。今日も11時頃、僕のところに来て、司令官と狩りに行きたいので猟銃を貸してくれないかと訪ねて来たばかりだった。僕は銃を持っていないので残念ながら貸してやれず、カミュはそのままたったひとりで」馬で散歩に出かけてしまった。

事件を扱った研究書などで、カミュは他の2人の士官と出かけたという誤った記述を見かけることがあるが、ブレンワルドの日記からも単独で、しかも銃を持たずに出かけたことが明らかとなった。カミュは山手の外国人墓地に眠っている。

商業活動が忙しくなり交際範囲も広がっていくと、日記へのフランス人の登場も少なくなるが、64年4月に第2代フランス公使ロッシュが着任すると、その名前が頻繁に出てくるようになる。リンダウと争った領事館用地問題でロッシュはブレンワルドの力強い味方となっていく。

（横浜開港資料館主任調査研究員・中武香奈美）

＝おわり

フランス軍艦で開かれた幕府と英仏代表の居留地防衛をめぐる秘密会談（「ル・モンド・イリュストレ」1863年9月26日号より、横浜開港資料館所蔵）

■神奈川新聞社提供